

田舎へ行こう

三ツ橋よしみ

一昨年、同居していた母がなくなった。一年かかって、実家の後片付けをすませた。今年になって、やっと一息つくことができた。気付くと、娘は彼氏の元に去り、家は私たち老夫婦と犬のタローだけの暮らしとなった。

「田舎暮らしがしたい」と夫が言い出した。畑をたがやし、米を作り、自給自足するのが、かねてからの夢なのだそうだ。「東京の狭い家では犬がかわいそうだ。ストレスがたまつて、病気になってしまふ」と犬をなでる。

東京生まれ、東京育ちのわたしは、渋谷、恵比寿が遊び場だった。夜の街に繰り出すわけではなかったが、夜、真っ暗になるような場所には住みたくないし、不安だ。土いじりも、観葉植物の手入れもするが、それ以上の興味はない。

夫は、うれしそうにネットで物件をさがしはじめた。郊外の不動産業者に予約を入れ、家を見に行く手配をした。家族の一員だから、家を見に、愛犬タローも一緒にいくことになった。

東京から車で一時間あまり、千葉県佐倉市の住宅街に案内された。中古住宅だが、しっかりした作りの家だった。東京にはない広くて気持ちのいい庭があった。リードをはなすとタローの目が輝いた。走り回る犬に、夫はここに顔だ。「ここに決めよう」という。



不動産屋に居合わせた地元の人が、畑がやりたいなら、一反（300坪）ぐらいどうですかとすすめる。坪一万円だという。いえいえ、ほんのお遊びですから、夫は顔を赤くした。

娘を佐倉に案内した。

「遠いね」

「刺激が少なすぎて、お母さん、ボケちゃうんじゃない？」と心配する。

世田谷に住む姉は「そんなに遠くに行っちゃうと、めったに会えなくなっちゃうじゃない」と電話口で涙ぐんだ。

夫の友だちは「三日であきるんじゃないの？」と言った。

知り合いのおばさんは「キュウリがたくさん取れたら送ってね。おいしいキュウリ漬をつくるから」とはげましてくれる。

週二回、勤めている会社の同僚は「佐倉から所沢に通う気なんですか。

えっ、それって小旅行じゃないですか」とあきれられた。

佐倉市役所に転入届を出した。犬のタローには佐倉市の犬鑑札と愛犬手帳が交付された。

新居の近くに愛犬病院を見つけた。狂犬病の予防注射に出かける。注射を待つ間、タローはおびえて、キャンキャン、キャンキャンと、踏切のかねのようになき騒ぎ、若い看護婦さんに「大げさね」と笑われた。

写真… 佐倉ふるさと広場 チューリップまつりにて